



注目! 話題のモデル  
Topics

### 新開発RCAプラグがレコード音楽の魅力を一層引き出す 信号系プラグにNCF素材を初採用 明確な進化を実現させた最高峰RCAケーブル

フルテックの近年の製品は、特殊素材NCFの採用が目立つ。さまざまな部分で従来の性能を超えるクオリティアップを実現し、すでに大きな評価を得ているのはご存知の通り。しかも安易な導入ではなく、徹底して品質と音を突き詰め、聴いて納得のいく品が完成して初めて製品化する姿勢も評価されるポイントだ。今作は、NCFで信号系ケーブルを進化させる嚆矢となるモデル。聴けば音の違いを明確に感じる、大きな進化を遂げた新作ケーブルの魅力を角田氏がアナログレコードで検証した。

Text by  
**角田郁雄**  
Ikus Tamada  
Photo by 田代法生



## FURUTECH Lineflux NCF (RCA)

RCAインターコネクトケーブル ¥225,170 / 1.2mペア(税込)

右側の黒いスタンドは、低い位置にある端子にも対応できる、FURUTECHのコネクター/ケーブルホルダー「NCF Booster-Signal-L」(¥16,280、1個、税込)

#### Specifications

●導体：1.3mm単芯α(アルファ)OCC導体 ●シールド：2層  
●絶縁/誘電体：高級ポリエチレン ●共振減衰材料：ケース内のナノセラミック/カーボン/ウダー-コンパウンド ●ケーブル外径：約13.0mm ●プラグ外径：全長約φ14.0mm×54.0mm

こうしたなかでフルテックは、いかにして信号系コネクターにNCFを使うべきか、数年にわたり研究と試作を行ってきた。そして遂に昨年後半、RCAプラグCF-1102 NCF(RCA)を実用化。ロングランモデルであった同社フラグシップケーブル、Lineflux(RCA)を進化させ、新たにLineflux NCF(RCA)を登場させた。その導体は長年、高評価を受けているαOCC単線銅で、シールド材も同材を使用し、2芯シールド構造としていることが特徴だ。さらに静電容量を下げるため、多数のポリエステル系で信号線を覆い、さらには振動を低減する素材を採用した。多層構造のケーブルなのだ。プラグも高品位で、ステ

フルテックはNCF素材を開発して以来、さらに躍進を遂げている。世界のオーディオブランドも、その振動低減と帯電防止効果を高く評価して自社製品にNCF電源プラグを採用したり、併せてケーブルの振動と帯電を防止するケーブルサポート、NCF Boosterシリ

プラグにNCF素材を採用し  
入念に作り込んで大幅進化



ンレスとカーボンファイバーを使用したハウジング(コネクタ1カーバー)により、確実な接触と振動低減を実現していた。

そのRCAプラグが今回、CF102 NCF(R)となった。その構造は実に精密感に溢れている。中心のホット(+)ピンは、従来から中空になっていたが、そこにNCF素材を充填し、その延長をやや大きな円形とし、コールド(-)側の絶縁体となるように成形した。さらに、その外周に銅合金制振材固定リングを設置し、振動低減と強度向上を行った。この部分は、非磁性ステンレス製ハウジング(α銅合金ロジウムメッキ仕上げ)の先端部に設置される。導体は、ハウジング中間にあるスベースで、銅合金ネジで固定できる仕組みになっている。なお、ホット線のネジ止め部には、ワンプイスαOCC導体チューブが採用されている。このハウジングの外周には、ハウジングカバーが配置されるが、その外周表面にはNCF素材と銀メッキの3Kカーボンファイバーをコンビネーションした独自素材を採用している。この仕様はNCF仕様の最高峰電源プラグと同じく、今回注目される技術だ。

今回注目される技術だ。



FURUTECHのハイエンドグレードRCAプラグ「CF-102 NCF(RCA)」(¥21,120.2本1組(税込))

ワンプイス Alpha OCC 導体構造拡大図



NCF 素材を挿入  
チューブ状のα(アルファ)OCCロジウムメッキのワンプイス導体ピンにフルテックの突極の帯電防止および共振低減材料NCFを注入



最新の完成品「Lineflux NCF(RCA)」(NCFモデル、手前)と、そのNCFを使用していない従来モデル「Lineflux(RCA)」とで比較試験

これらの仕様で注目されることは、推察となるが、ホット線の振動低減や帯電防止をするだけでなく、ホットとコールド間の絶縁体における静電容量を下げることも可能になるであろうことだ。その結果として、コネクタによる固有音(アタックが強くなる、硬めの音になるなど)も低減するであろうと推察される。

解像度や弱音の再現性が向上  
奏者の動作や余韻も浮き彫り

そんなことを考えながら今回、試験をした。プレーヤーは、オルトフォンのMC Verissimoを装着したテクニクスのSL1000Rで、フォノEQにアキュフェーズのC147、同ブリアンブC13900、同パワーアンブA175を使用し、B&W803D3をドライブした。Lineflux(RCA)

CA)とLineflux NCF(RCA)は、フォノEQとブリアンブ間に接続して比較した。実際に再生すると、予想外にその音質差が大きいことが理解できた。

新製品Lineflux NCF(RCA)では、S/Nが明らかに向上し、いままでは聴こえてはいたが、あまり意識していなかった微弱音がクローズアップされた。ECMのトルド・グスタフセン・トリオでは、ピアノやシンバルの余韻が明らかに増え、奏者の微妙な動作も浮き彫りとなった。解像度が向上したうえ、弱音の再現性が高まった。

たのだ。さらに音の立ち上がり  
に強調感がなく、明瞭度が高まっている。一枚も二枚もベールを剥いだ透明度の高い音質が確認でき、奏者の空間描写性がリアルになっている。音数も増えた印象で、倍音が実に豊富となった。したがってレファレンスのヴォーカル曲「クワイエット・ウインター・ナイト」では、空間性に溢れた美音、美声が堪能できた。さらに、オルトフォンMC Verissimoの搭載する、ダイヤモンド・カンチレバーの広いダイナミックレンジと高解像度特性を十分に体験させてくれた。

次にNCF Booster  
Signalilを、床とフ  
オノイコライザー個端子の2カ所に設置。すると、音の明瞭度と音場の見通しが向上した。

本ケーブルはこのように、高解像度でビュアな伝送を実現し、その効果は実に大きい。高く評価したい。こうした特性を備えるので、特にアナログ再生では、RCA出力のプレーヤーにも効果を発揮することであろう。個人的には今後、NCF仕様のDIN-RCAフォノケーブルや、XLRバランスケーブルの登場も期待したいところだ。